

わず、身に纏つてゐるところの、上衣の襟が折り開かれた現在の洋服に類する衣服のことであるが、龜茲（キジ）の千佛洞の壁畫に描かれてゐる西域人の服裝もそれである。思うに當時はこのような服裝がペルシア（波斯）のイラン人やこれと同種の西域人の服裝であり、彼らの文化的影響を受けることが多かつた北族の間にも廣まつていたのであろう。

單に貴族的であつたというだけでなく、經濟生活の發達が一般に著しかつた唐代には、厚葬の風が非常に盛んであつて、埋葬に際して、精巧な明器を副葬することが多かつた。今日當時の墳墓から見出される土偶は、即ちこの明器の一種であるが、その中には明かに唐人ではない容貌・服裝のものが甚だ多い。これは西域の胡客、即ちこの頃東西の陸上貿易に最も活動してゐた、いわゆるソグド人（康國人・九姓胡）などによつて代表される西域のイラン系住民を象つたものに外ならず、唐人も彼らの服裝を採用したのである。明器を副葬するのは、死後の世界においても、死者が現世と同様の生活を營むという觀念に基いて起つた習俗であるから、右の事實はこれらの胡人の唐に來往・來住する者が多かつたことを證明するとともに、彼らの服裝が唐人の間にも流行したことを證明する記録以外の資料と言つてよい。なお土偶の中には往々女子の騎馬像があり、文獻と相俟つて唐代の婦女子の間に乘馬の風が盛んであつたことが知られるが、これも西域人もしくは北族の風俗を學んだものであろう。

服裝に限らず胡俗一般に對して唐人が異常な愛着をもつていたことは、元稹がその法曲の中で「女は胡婦となつて胡妝を學び、伎は胡音を進めて胡樂を務む」と歌つてゐるのや、白居易がその時世妝の末に「元和（八〇六—二〇年）の妝梳、君記取せよ、髻堆面緒は華風に非ざるを」と詠じてゐるのによつてもその一斑を察し得るである。